

特 記 仕 様 書

第1章 総則

第1節 適用

- 1 本特記仕様書は、ため池整備事業 俵原池改修工事 に適用する。
- 2 本特記仕様書に記載のない事項については、次によるものとする。
 - ・土木工事共通仕様書(広島県)
 - ・土木工事共通仕様書(農林水産省構造改善局)
 - ・その他関連規格類

第2章 材料

第1節 登録リサイクル製品の使用について

- 1 この工事の施工に際して必要となる資材等について、「広島県生活環境の保全等に関する条例」に基づき登録された製品(登録リサイクル製品)を使用することが可能である場合は、その使用に努めるものとする。
- 2 登録リサイクル製品を使用した場合は、登録番号と使用量を監督員に報告すること。

第3章 施工・管理

第1節 堤体工

- 1 雑物の除去
掘削をする時は、堤敷内の腐植土、草木根等の有機物質及び風化転石泥土等、基礎として不適当なもの並びに池水の浸透を誘導する雑物は、完全に除去しなければならない。
- 2 表土はぎ取り
 - 1) 表土のはぎ取りは、原則として全面にわたり同時に施工するものとする。盛土の進捗に応じて表土をはぎ取る場合には、表土と盛土を混合しないようにしなければならない。
 - 2) 表土のはぎ取り厚さは、別に指示しない限り30cm以上とする。
 - 3) はぎ取り後、降雨あるいはそのおそれのある場合は、土砂の流出を起こさないよう全面にシートを覆い、水たまりのできないようにしなければならない。
- 3 床掘
 - 1) 床掘は、設計図書に示す深さまで掘り下げ、掘削完了後は、監督員の検査を受けなければならない。ただし、所定の深さ以前に良質堅固な不透水層に遭遇した場合は、監督員の指示を受けなければならない。
- 4 基盤面の仕上げ
基盤と築堤土との接触を密にし、漏水をなくすため基盤面を入念に整形清掃しなければならない。
- 5 旧堤の切取り
旧堤の切取りは段切りを原則とする。

6 過掘の処置

過掘の処置については、監督員の指示によるものとし、これに要する費用は乙の負担とする。

7 掘削土の流用

掘削土を流用し施工する場合は不良土等が混入しないようにしなければならない。

8 掘削法面の保護工

掘削法面の保護工は十分工程計画を検討し、風化、変質が生じないようにしなければならない。

9 用土

- 1) 用土は、それぞれ設計図に示された位置区分に使用しなければならない。
- 2) 用土は所定の密度が得られる含水比のものを、過湿又は、乾燥したものを使用する場合は適切な方法で含水比の調整を図らなければならない。
- 3) 用土が降雨に濡れたときは、一時他に搬出して乾燥し、監督員の承諾を得た後でなければ使用してはならない。
- 4) 用土が良質な土質であっても凍結しているものは、使用してはならない。
- 5) 降雪又は積雪がある場合は、監督員の指示を受けなければならない。

10 用土の掘削

用土掘削は、1日計画盛度量程度とし、降雨降雪その他の事由により残土が生じた場合は覆いなどを行い過湿、乾燥土とならないよう処置しなければならない。

11 用土のまき出し、転圧

- 1) 用土のまき出し及び転圧は、必ず堤体の縦断方向に施工するものとし、横断方向に層状にならないよう注意しなければならない。
- 2) まき出した土は、その日のうちに締め固めを完了する事を原則とする。
- 3) 床掘部の盛土には、基礎及び刃金土の接触を密にし湧水のある時は、監督員の指示に従い処理し、施工しなければならない。
- 4) 地山及び既成盛土との接触面は、特に入念に締め固めなければならない。
- 5) 地山又は、既成盛土との接触面及び地形形状タイヤローラーの使用が不可能な箇所の転圧に際しては、地山との密着及び既成盛土との均一化について特に留意し、タンパー、振動コンパクタ、振動ローラー等によって入念に締め固めをしなければならない。
- 6) 転圧作業にあたり、ローラーの転圧幅は、少なくとも30cm以上重複させなければならない。
- 7) 転圧作業の主力は、タイヤローラーとする。また再び盛土を施工する場合は、表層を切りゆるめた後続行するものとする。なお、標準的まき出し厚、仕上がり厚、転圧回数を次に示す。

盛土の種類	使用機械	締め固め速度	まき出し厚	仕上り厚	転圧回数
ランダム材料	振動ローラー	〃	30	22	4
ランダム材料	タンバ60～100kg	〃	20	14	4

※ ランダム材(さや土)

- 8) 仕上り厚、転圧回数の決定については現場での施工試験を行い、監督員と協議し決定するものとする。
- 9) 法面部の盛土については、規定以上の寸法の広さまでまき出し、十分締め固めを行い、はみ出した部分は盛土完了後に切りとって、丁寧に土羽打ちをして仕上げるものとする。
- 10) 霜柱や凍結した表土は、必ず除去して転圧するものとする。
- 11) 盛土の施工中において、用土の不適、もしくは転圧の不十分、又は乙の不注意によって湧水又は、盛土法面の崩壊があった場合には、その部分及びこれに関連する部分の盛土について再施工を命ずることがある。

- 12) 築堤現場は常に排水を十分にし、雨水等が盛土部分に残留しないよう緩勾配となるよう仕上げなければならない。

第2節 付帯構造物

1 樋管工

- 1) 底樋管巻立コンクリート及び止水壁周辺部の盛土は、特に入念に締固めなければならない。また、締固め機械によって底樋管等に損傷を与えないよう十分注意しなければならない。
 - 2) 底樋管上の盛土の転圧にあたり巻立コンクリートの天端から60cmまでは重機械を使用してはならない。
 - 3) ボックスとの接合部で漏水が起きないように細心の注意をしなければならない。
- 2 製作に使用する全ての材料は、十分水圧に耐える強度を有し、各種形状寸法は、正確に図面に適合したものでなければならない。
 - 1) 乙は製作に先立ち、本仕様書及び設計図書に基づき、承認図を提出し、監督員の承認を得るものとする。
 - 2) 製作に使用する全ての材料は、十分水圧に耐える強度を有し、各種形状寸法は、正確に図面に適合したものでなければならない。
 - 3) 鋳鋼、鋳鉄、砲金等の鋳造品は十分な押湯をし、表面平滑であって鋳房、気泡、その他 鋳造上の欠点のないものでなければならない。

第3節 施工管理

- 1 盛土の施工にあたっては、施工管理試験を行って、所要の締固め度が得られるよう管理しなければならない。
- 2 標準的な施工管理試験の回数等を次ぎに示す。
 - 1) 含水比試験は1日1回午前とする。
 - 2) 密度試験・透水試験はランダム材料はおおむね50～100cmに達することに1回とする。
 - 3) ランダム材料の施工後の透水係数の許容値は下記の通りとする。

$K = 1 \times 10^{-5} \sim 1 \times 10^{-3} \text{ cm/sec}$ ランダム材料

この目標となる遮水性材料の乾燥密度の許容値は下記の通りとする。

$D = \text{最大乾燥密度} / \text{標準突固め最大乾燥密度} \times 100 \geq 95$

含水比 最適含水比 $\pm 5.0\%$
 - 4) 前記の試験の結果、管理基準値(許容値)に達しない場合は、監督員の指示に従うものとする。

第4章 その他

本特記仕様書及び設計図書に明示していない事項または、その内容に疑義が生じた場合は、監督員の指示を受けること。